

# 『関西大学百二十年史』編纂の経緯

年史編纂室

## 1 編纂体制

百二十年記念事業

各学部選出委員および学識経験者等から構成される関西大学年史編纂委員会では、平成十四年四月から、創立百二十年を記念する「年史」の刊行について協議をはじめている（以下、本委員会と略す）。

翌年五月に開催された本委員会で、印刷業者を決定し、実質的な編纂活動は、百二十年史編集委員会を設置しておこなうことが決まった（以下、小委員会と略す）。両委員会の構成員は後掲のとおりである。

## 2 編集方針と構成

各ページにカラー写真

「年史」は、『関西大学百二十年史』（以下、『本史』と略す）と写真を中心に構成した『関西大学 120年のあゆみ』の二種作製することが、平成十五年十月開催の本委員会において決定している。

『本史』は、当初、通史のほかに人物に焦点をあてた編集案（「関西大学青春群像」、「関西大学の二二〇人」等）も検討したが、その選定基準が難しいため、「歴史編」と「現代編」の二部構成とすることに決まった。

『本史』の体裁は、A4判、横組み、オールカラー、



『関西大学百二十年史』

四一〇ページ、箱入り。

平成十九年三月三十一日、発行 学校法人関西大学、  
編集 関西大学年史編纂委員会。

口絵、歴史編、中口絵、現代編、資料、関西大学略年譜の構成となっている。「歴史編」は各ページの下段に、「現代編」は上段に、カラー写真を掲載しているのが特色である。

「歴史編」は創立から百周年まで

「歴史編」は、『関西大学百年史』をもとにして創立からの百年間を簡潔に要約して述べ、その後明らかになった事柄を書き加えている。たとえば、平成十八年三月に発掘された『関西法律学校規則』（明治十九年十月発行）によって、創立期の事情を詳しく描くことができた。執筆は、年史編纂室が担当し、ほぼ章別に完成次第、本委員会にて報告して了承を得た。その構成はつぎのとおり。

第一章 創立（明治十九年～大正十一年）

創立から旧制大学令による大学昇格まで

第二章 実化（大正十一年～昭和二十年）

### 大学昇格から終戦まで

## 第三章 新生（昭和二十年～昭和四十四年）

### 新制大学から学園紛争まで

## 第四章 拡充（昭和四十五年～昭和六十一年）

### 学園紛争終結から創立百周年まで

## 「現代編」は全学体制で執筆

創立百年以降の二十年間は、「現代編」としてテーマごとに分け、編年体で記述し、資料と略年譜を掲載した。

その構成は、教育、研究、課外活動（学生生活）、学校法人の管理運営の四章立てとし、第一高等学校・第一中学校・幼稚園、校友会、教育後援会は別に章を設けることが決まった（平成十六年七月十三日開催本委員会）。

## 第一章 教育―新風みなぎる勉学の庭

## 第二章 研究―進化する学問環境

## 第三章 課外活動―ゆたかな人材輩出力

## 第四章 学の営み―夢の実現を支える組織の輪

## 第五章 第一高等学校・第一中学校・幼稚園

## 第六章 校友会



「歴史編」

第七章 教育後援会

創立百二十周年記念事業には全学的な体制で取り組んでいるところから、「現代編」の原稿執筆は、学内関係部署に依頼することが決まった（平成十七年二月二十一日開催本委員会）。『関西大学百年史』をはじめとする既刊の通史は、年史編纂委員会によって執筆・編集されているので、この点は「本史」の大きな特色といっている。

定例の事務管理職会議（平成十七年六月二日開催）において、「現代編」の原稿作成を依頼し、次に原稿執筆に関する説明会を開催した（六月十七日）。その際、「目次案」、「原稿作成上の留意事項」、「執筆原稿サンプル」（「歴史編」の原稿）、「関西大学年史紀要」（年一回発行）に掲載した「関西大学年表」（昭和六十一年〜平成十五年）を配付している。各部署で原稿を作成するに際しては、新たに原稿を執筆してもよいし、すでに「自己点検・評価報告書」や「関大通信」などで発表した原稿をもとに再編集してもよいこととした。

書式や用語等の統一をはかるため、各部署が作成した原稿を本委員会において修正する場合があります。



〔現代編〕

ついても了承を得た。原稿の提出期限は、平成十七年九月三十日とした。全体として、ほとんどの原稿が期日までに提出されたことは特筆に値する。

### 3 編集作業

#### 執筆担当部署との調整作業

各部署で作成した「現代編」の原稿校正は、小委員会委員と事務局が担当した。「現代編」の全体を各委員が分担して、問題点を洗い出し、章別に意見を交換した。

字句の統一は後回しにして、記述内容の修正が必要と思われる箇所から、原稿執筆部署との間で入念に調整作業を開始した。また、統計データは可能な限り最新のものを採用するよう努力し、次のような点に留意した。

- ①見出しを適切につけること。
- ②記述が重複する場合は、たとえば、「本編第一章第2節参照」と付記して、初出箇所を示すこと。
- ③抱負、課題などへの言及は控えて、客観的な記述を旨とすること。

④堅苦しい印象を避けて、文意を尊重しながらも、読みやすさを主眼とすること。

なお、小委員会の検討結果ならびに進捗状況は、その都度本委員会に報告した。

#### 百二十年目の現在

「現代編」は、原則として、昭和六十一年から平成十八年十一月四日の百二十周年記念式典までを記述対象とした。ただし、第一章「教育」の教務センター構想、第四章「学の営み」第7節「新時代のプロジェクト」のように、進行中の事業については、追記せざるを得なかった。校正作業中に飛び込んできた学校法人福武学園との合併、高橋大輔選手の世界選手権フィギュアスケート銀メダル獲得の吉報等も盛り込んだ。

第一章では、総合情報学部の新設や進展する国際交流の実情、webを利用した教務システム、教務センター設置による学生と教員へのサービスの充実、法科大学院の設置等について述べている。第13節では、阪神淡路大震災にも言及している。

各分野の旺盛な研究活動については、第二章「研究」で詳説している。とくに第9節の私立大学学術研究高度化推進事業が注目に値しよう。

学生のめざましい活躍は、第一章第11節「社会貢献と高大連携」における、文化、学術、福祉、ボランティア活動等においてすぐれた業績をあげた学生個人や団体に関する部分と第三章「課外活動」の運動各部・文化各部の箇所等でふれている。

第四章第2節「大学の財政」では、グラフと表を駆使して、法人の財政状況を明快にするよう、工夫した。校友は、第4節の学舎と施設の写真から、その充実に目を見張るに違いない。

第五章「第一高等学校・第一中学校・幼稚園」は、めぐまれた環境のなかで学習する生徒や園児の様子を活写している。

第六章「校友会」と第七章「教育後援会」の多彩な活動を振り返るならば、新旧の関大人は、母校関西大学百二十年の歴史がいかに稔り豊かなものであるかに、感慨を禁じ得ないはずである。

### 口絵——百二十年記念式典と祝賀会

平成十八年十一月四日に開催された百二十年記念式典の森本靖一郎理事長の式辞、河田悌一学長の挨拶を巻頭に掲げ、口絵には見開きで厳肅な式典と和やかな記念祝賀会のカラー写真を配した。

### 中口絵に描かれたキャンパスライフの日常

歴史編と現代編の間に、「Kansai University, Now」と題して6ページ分の中口絵を置いた。口絵は咲きほころぶ桜花にはじまり、あざやかな新緑、愁いにみちた秋色。季節ごとに色あざやか表情を見せるキャンパスで、若者たちの笑顔がはじける。キャンパスの主役は学生である。多くの先輩たちが学び、青春を謳歌してきた千里山、高槻、天六のキャンパスを闊歩する関大生が、祝福の胴上げをされる卒業の日。社会に役立つ人間として、かれらは羽ばたく。



〔中 口 絵〕

資料編 データでみる関西大学

本編末尾の資料編（24ページ）は、1歴代理事長一覽（新制大学）、2歴代学長一覽、3教育職員(1)大学（専任）・(2)高・中・幼（専任）、4事務職員、5学生、6生徒・園児、7学部志願者、8校友、9図書、10資金収支決算額、11資産、12土地、13建物、14私立大学等経常費補助金、15鳥瞰図（キャンパスの変遷）、16関西大学の構成からなるデータ編、ならびに関西大学略年譜（14ページ）によって構成した。3から14のデータは、大学の成長過程をなるべく見やすく、わかりやすくするために棒グラフで示した。各データは『関西大学七十年史』（昭和三十一年三月三十一日・関西大学発行）、「関西大学規模比較表」（企画調査課）、「学校別卒業生数」（校友会）に依拠した。

関西大学略年譜は、並行して編集をすすめていた写真集『関西大学120年のあゆみ』を基礎に加筆し、『あゆみ』とは別アングルの写真を選出するよう、心がけた。この資料編は、本編の裏づけ資料として不可欠の位置を占め

るといえる。卷末に、『関西法律学校規則』（明治十九年十月発行、影印版）を収録した。

### 写真の選定

「歴史編」の写真の多くは、『関西大学百年史』に掲載したものを使用した。

「現代編」については、各部署に原稿を依頼した際、関連する写真も併せて提出するよう要請していたが、その準備は必ずしも容易ではなかったため、大半は、以下のなかから選定した。

- ① 「関西大学通信」掲載写真（ネガ・ポジフィルム）。
- ② 校友会機関紙「関大」掲載写真（プリント）。
- ③ 広報課から移管された学内行事、キャンパス風景等の写真（ポジフィルム）。各年度テーマ別でファイルに収納されている。
- ④ 学内各部署（国際交流センター、エクステンション・リードセンター等）が広報用あるいは記録として保管する写真（ネガ・ポジフィルム）。
- ⑤ 広報課、入試広報課の近年の広報活動用の写真（電

子データ形式）。

⑥ 報道機関が撮影したスポーツ写真。

⑦ 個人所蔵の写真（プリント）。

⑧ 今回新たに撮影した写真（広報誌、公開講座パンフレット等）。

本文の記事と関連する写真を探し出すことは、困難をともなった。「関西大学通信」掲載写真も完揃とは限らず、たとえば、阪神淡路大震災時の救援活動の写真のように、何人かの当時の執筆者に問合せ、ようやく探し当てたものもある。体育会や学生寮のOBから当時の写真提供をおおぐこともあった。全ページにカラー写真を掲載するという体裁のため、バランスを考えて別の写真と差し替えたり、キャプションも吟味したり、と苦心した。なお、写真の掲載にあたっては、肖像権と著作権に配慮した。

## 4 配付と広報

『本史』は、全国の関係諸機関、海外の協定校、式典



来賓、寄付拝受の個人や企業各社に進呈した。関西大学への志願者の多い高等学校、校友が多数在住する近畿地方の市町村立図書館などにも届けるよう配慮した。

刊行直後、「関西大学通信」と校友会機関紙「関大」で、『本史』の全容の紹介と頒布方法について周知し、関西大学のホームページ上でも紹介している。全国各地の校友から問合せが相次いでおり、意を強くしている。

## 5 使用資料（写真）の整理と保存

『本史』で使用した写真は、DVDとプリントで整理・保存し、学内諸機関等からの使用願に対応できるようにしている。

なお、これを機会に、プリント、ネガ・ポジフィルム  
の保存についても経年的に予算計上して改善を図ることとした。

### 関西大学年史編纂委員会

（平成十六年四月一日～平成十九年三月三十一日、五十音順）

#### 委員長

森本靖一郎（理事長）平成十六年四月一日～九月三十日、

池内啓三（常務理事）平成十六年十月一日～平成十九年三

月三十一日

#### 副委員長

市川訓敏（法学部教授）

#### 委員

青山千彰（総合情報学部教授）、赤松勝也（工学部教授）、

浅田正雄（社会学部教授）、石田健一（教育後援会）、小幡

斉（副学長）平成十六年四月一日～平成十八年九月三十日、

葛馬寿秀（学術情報事務局長）平成十六年四月一日～平成

十八年三月三十一日、熊博毅（学術センター次長）、芝井

敬司（副学長）平成十八年十月一日～平成十九年三月三十

一日、杉谷眞佐子（外国語教育研究機構教授）平成十六年

四月一日～平成十七年三月三十一日、関屋俊彦（文学部教

授）平成十八年四月一日～平成十九年三月三十一日、高橋

隆博（文学部教授）、東郷洋（学術情報事務局長）平成十

八年四月一日～平成十九年三月三十一日、永沼博道（商学部教授）、西川重幸（第一中学校教諭）、浜野潔（経済学部教授）、増地英一（校友会事務局長）平成十六年七月一日～平成十九年三月三十一日、山本英一（外国語教育研究機構教授）平成十七年四月一日～平成十九年三月三十一日、山野博史（法学部教授）、吉田永宏（文学部教授）平成十六年四月一日～平成十八年三月三十一日

#### 百二十年史編集委員会

（平成十六年四月一日～平成十九年三月三十一日、五十音順）

#### 委員長

市川訓敏

#### 委員

熊博毅、高橋隆博、浜野潔、山野博史

#### 事務局

（平成十六年四月一日～平成十九年三月三十一日、五十音順）

熊博毅、藤原有和、古川富美子、森田敏朗、山下靖子

（年史編纂室 藤原有和）